

強さを支える遺伝子

～ ケーススタディ：アシックス③ ～

アシックスが世界に誇るスポーツ工学研究所には、アシックスの強さを支える人たちが働いています。

日本のトップアスリートたちが通うのは、研究所にあるカスタムデザイングループの工房です。グランドマイスターの三村仁司氏は、トップ選手のシューズ作りを担当して「アシックスの顔」と呼ばれています。98%の形式値をカバーできる技術的なものをすべて頭に入れたうえで、科学的なことでは測れず微妙なさじ加減でしかできない2%の領域を選手との微妙なやり取りで自分のものにして、「神の頭脳を持つ男」と評価されています。

卓越した技術とその人柄ゆえに、多くのトップ選手から熱い信頼を寄せられる三村氏ですが、アシックスの課題は、三村氏が持つ技を、形式値として限りなく99.9%まで近づけていき、そのデータを共有された会社の財産として残していくことです。

スポーツ工学研究所のもう一つの大黒柱が、機能開発チームマネジャーの西脇剛史氏です。彼は、学生や一般のアスリートから市民レベルのスポーツ愛好者まで、広い範囲の人々をサポートするシューズの開発に携わっています。彼はこう語っています。

「僕たちに課せられた命題というのは、丈夫で履きやすく、自分の身体も守ってくれるような靴を作って提供し、スポーツを好きになってくれる子どもたちを増やしていくことじゃないかと思うんです。」この言葉は鬼塚会長の創業決意の言葉と共通しています。まさに「オニツカの遺伝子」が受け継がれているのです。

西脇氏の機能開発チームのスタッフは、様々な専門技術を持った人がいます。土木工学、ゴムの研究、流体力学など、スタッフは「混合部隊」と呼ばれています。多くの分野の人間がいて会話をしていれば、様々な角度からの発想やものの見方をすることができ、それが新商品の開発につながります。



そんな西脇氏が、シューズのクッション性を高めるアイデアを発見したのは、子どもとお風呂に入っていた時でした。スポンジで電車ごっこをしていた子どもの持つスポンジのつぶれ方から「ひらめいた」のです。さらに、家族でドーナツを食べていたときに、子どもが潰してしまったドーナツを見て、シューズの部品のアイデアが浮かんだそうです。

鬼塚喜八郎氏が、徹底してシューズを使う現場から、そして使う人からニーズを徹底的に聞き出して商品力を高めていくという遺伝子が、この会社の強みでもあるのです。